

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕自身、かなり悲観的に物事を考える人間で、なんでも事前に可能なかぎり準備をするように心掛けている。僕の周辺の人たちは、僕のことを冷静な人物だと見ているようだけれど、冷静なのではなく、神経質で心配性だから事前に考え、あらゆるケースについて想像しておく。□ 1、たいていのことが想定内になるだけの話だ。

僕は、人前で怒ったりしない。怒鳴ったりしたこともない。大学で指導している学生に対しても、強い言葉で叱ったことは一度もない。授業でも、まったく同じだ。□ 2、これは感情が安定しているからではない。事前に考えて、腹が立つ場合なら事前に腹を立てる。相手が言うことも想像し、事前に頭に来て、言い返す言葉まで考えておく。だから、実際にそのとおりになっても、顔色が変わらない、ということだと思う。へA

悲しいことについても同じだ。事前に想定し、充分に悲しんでおくことができる。ただ、楽しいことはあまり想定しない。その場で楽しく感じれば良いし、対処をしておく必要もないからだ。

起こりうるケースを想像しておくとき、悲観的な人間であれば、悪いケースから思い描く。だから、まずそうならないように対処し、そのうえで、なってしまったときにどうするかを考えておく。ここが大事な点で、対処には、この両者が必要である。防ぐための対処をしても、確率が下がっただけのことで、絶対に起きないわけではない。へB

悪いケースから優先的に対応するのも合理的だ。悲観した順であるから、素直にそのまま対処すれば良い。この想定には、不確定なものを危険側に見積もっておくことが必要である。五十パーセントの確率で起こりそうな悪い事態は、七十パーセントの確率だ、と自分に言い聞かせておく。へC

このような数の割増や割引きを、工学では「安全係数」と呼んでいる。たとえば、十トンが想定される最大の力だとしたら、十二トンでも壊れないように設計しておく。この二十パーセントの加算が、安全に見積もった程度になる。当然ながら、不確かな要素が増えるほど、安全係数は□ I。あらゆるものがばらばらについているから、それぞれに安全係数がかかれば、全体として大きな余裕を見込むことになる。へD

ほとんどの工業製品、人工物は、このように定められた設計方法で作られるのだが、それでも事故の発生を完全に封じることができない。多くの場合、悪い条件が重なって、安全係数で想定したものを超えてしまうからだ。□ 3、どこまでも安全

でもっと余裕を見れば良いではないか、と考えられると思うが、安全にするほど、費用が余分にかかる。□ 3、どこまでも安全にできるが、そこまで費用をかけられない、という実情がある。世の中に存在するものは、この兼ね合いでできているのである。

メーカーが生産する商品には、安全基準がある。消費者が間違った利用をした場合に危険がないか、という観点でデザインされ、またそういった注意書きを表示することが義務づけられている。これらの基準は、時代とともに厳しくなっているが、それは、大衆が自身に及ぶ危険に対して□ 2、ドンカンになっている証拠ともいえる。

現在の生活環境は、昔に比べて格段に危険が排除されている。家の中で火が燃えるようなことも少なくなった。火災報知器なども普及している。子供たちは、鉛筆を削るためにナイフを使わなくなった。学校の送り迎えも大人が見張るようになっていく。

「世知辛い世の中だ」という声は、どの時代でも聞くことができる。いかにも、昔は長閑で良かったように語られるけれど、どこを見て、どんな統計を調べても、昔よりも今の方が安全性は高まっている。世知辛いように見えるのは、危険を煽るマスコミによって、大衆が「悲観」するためだが、これが安全の普及につながっているのだから、危険を煽ることを非難するのも筋違いだろう。どちらかというと、あまりにもカホゴな環境なのではないか、といった逆方向の「悲観」もしばしば登場する。それもまた、悪いとはいえない。つまり、「悲観」には大きなデメリットはなく、安全や自由などを実現するために必要な、前向きな姿勢だといえる。また、「悲観」によるデメリットも、同じく「悲観」によって制御可能だ、ということである。

したがって、どんなプロジェクトであれ、物事を実現し、思いどおりの結果を得るためには、最初から大いに「悲観」すること、真面目から悲観して臨むことが重要である。つい、悲観するのはいけないことではないか、と尻込みする人もいるかもしれないが、そんな必要はまったくない、と断言しておこう。

「悲観」にマイナスの印象を抱く傾向は、たしかにある。□ 4、「神経質」だという評価を受けたり、「水を差すな」などと言われたりする。「悲観」がこのような否定的な評価を受けるのは、そもそも集団が「楽観」の空気によって結束しようとしているからだ。「このままではまずいのではないか」と指摘しても、「みんなで一所懸命頑張ろうとしているのに、どうしてそういう後ろ向きなことを言うのか？」と排除される。疑ってはいけない、後ろを見るな、ただ力を合わせて頑張れば良い、という精神論である。

これは、神輿を担いで熱狂する祭のような手法といえる。集団陶酔というか、酒に酔っている状態、あるいは一種の洗脳のような操作である。³「みんなで力を合わせて」という綺麗な言葉だけで進もうとしているからこそ、冷静に理屈をぶつけてくる悲観的発言を嫌うのだ。独裁者が国民を煽動しようとするときにも、ほぼ同じ現象が観察できる。ちよつとした非難を見逃さず、圧倒的な統制を振り翳す。異分子を徹底的に排除する。

かつて日本は、大勢が危険な兆候に気づかず、破滅へと突進してしまった。その大きな失敗に懲りて、水を差すような発言が、社会の冷静さを維持するためにも重要なものだとなんは気づいた。この見地から、言論の自由などが憲法に定められたのである。つまり、みんなが一斉に動こうとしているときであっても、誰かがブレーキ役になることが、グループの安全性を高めるということだ。「悲観」は、非難される行為ではない。⁴誠実に「悲観」し、みんなの役に立っていると自負してもらいたい。

(森博嗣『悲観する力』による)

※煽動……人の気持ちをあおり立てて、ある行動をすすめるそのかすこと。

問一 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

ア しかし イ つまり ウ あるいは エ では オ だから カ たとえば

問三 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

ア 細くなる イ 不安定になる ウ 低くなる エ 高くなる

問四 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問五 次の一文は、へAへBへCへDのどこに入りますか。記号で答えなさい。

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

問六 a b c の意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- a 世知辛い ア 暮らしにくい イ 刺激的である ウ 他人に厳しい エ 手間がかかる
b 尻込み ア 不平を言う イ 腹を立てる ウ ためらう エ とがめる
c 水を差す ア 人のせいにする イ 邪魔をする ウ 落ち着かせる エ 大きな顔をする

問七 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問八 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

問九 ①②③④⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

【逆に、良い事態については、確率を低く見積もる。】

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

白い下敷きに、硯すずりに、水の入った容器、棒状の墨、一本の筆に、内側に仕切りの付いた丸味を持った花形の陶器のお皿、最後に布巾①だ。

「下敷きは白いものを使う。これは紙を敷いたときに墨の濃淡がはつきりと分かるからだ。水墨画というのは、墨を水で薄めて使ってさまざまな変化を出していく。その変化をなるべく見やすくするための工夫だ。次にその仕切りの付いたお皿は梅皿うめざらという。形も梅の花のようだろう？ パレットだと思えばいい。絵を描く人間ならお馴染みの道具だが、描かない人はあまり見たことがないだろう。水を張った容器を筆洗ひっせんという。そして、あとは硯に、筆に、墨。墨は固形墨を使う」

「墨液ぼくぎではないんですね。本格的な感じがします」

「墨液を使って教えることもあるが、私はあまり好きではない。それに良い硯に墨液を注ぐなんてもったいないよ」

「これは良い硯のですか？」

「ああ、とても。使いこなせば、この世界と同じほど微細な墨がすれる」

僕はびっくりして硯をまじまじと見た。掌てのひらよりも少し大きいくらいの何てこともない長方形の硯に見えたが、確かに立派な木箱に入っていて蓋もついている。良いものだと言われると、なんとなく良いものだという気がしてしまうから不思議だ。ただの石だが石以上のものに感じる。

「硯は、書家や水墨を描く絵師にとっては、刀みたいなものだよ。そこからすべてが始まるんだからね」

「そんな大事なものを使わせていただいて、いいんですか？」

「大丈夫。大丈夫。手に入るのなら道具は良いものを使わないとね。良い硯だから大事にしてあげてね」

「分かりました。大事に使わせていただきます」

嬉うれしそうに湖山先生は微笑ほほえんだ。先生自身も道具にたくさんこだわりのあるのだろう。超一流の絵師なら当然のことなのだろうけれど、その当然の言葉でも本人から聞くと嬉しい。

「では、まずは墨をするところから。これがなければ始まらないからね。おっと、水滴すいてきがなかったね」

湖山先生は立ち上がって、後ろの道具箱から、小さな急須きゅうすのような容器を取り出してきた。そこに水が入っているらしい。湖山先生の皺皺しわしわの手が、硯に水を注いで、硯の面を濡ぬらした。

「さあどうぞ」

と、湖山先生は墨をするように促うながした。僕は①墨を持って、硯の上でゴシゴシとすり始めた。おもしろいくらいに墨はすれて、透明な水は真っ黒になっていった。

しばらくすっているとネバ②りが出てきて、あとどれくらいすればいいのだろう、と視線を上げると湖山先生は居眠りをしていた。

確かに退屈たいくつだろうけれど、居眠りしなくても、とも思ったが、とりあえず湖山先生を起こすと、

「もうできたかね？」

と、私はまるで居眠りなんかしてなかったぞというような顔で、起き上がった。それから、僕の座っている席のほうへやってきた。

①僕は背筋がぐつと伸びた。

着ている作務衣さむえから漂う清潔そうなおいは何なのだろう、と思っていると、湖山先生は無造作に筆を取って、目の前の紙に何かをバシバシと描き始めた。

この前と同じ、湖畔の風景が出来上がり、次に紙を置くとケイコク③が出来上がり、最後には、竹が出来上がった。どれもまさしく神業かみわざで、一瞬の出来事だった。どうしてこんな速度で、こんなに高齢の老人が筆を操れるのだろうか？ 年齢を感じさせない若々しい動きだった。そして何より速い。動きの細部についてはあまりに速すぎて分からない。手に持った筆が、先日と同じく、硯と梅皿と布巾と筆洗の間を回転しているということしか分からなかった。

気づくと墨はなくなり、硯の中身は空っぽになっていた。描かれた絵は床に広がっていた。そして湖山先生は衝撃的な一言を、僕に告げた。

②「もう一回。もう一回、墨をすって」

僕は啞然あぜんとしながらも、また一から墨をすり、湖山先生はうたた寝を始めた。

何が起こったのだろうか？ 何か、気に障さわることをしてしまったのだろうか？

いろいろと思案しながら、②墨をゴシゴシすり、これでいいだろうというところでまた湖山先生を起こした。

特別に機嫌が悪そうでもなく、かといって良さそうでもなく、また筆を取ると一気呵成あいきかせいにバサバサと描き上げて、硯の中身を空っぽにした。それからまた、さつきと同じせりふがかえってきた。

「もう一回」

僕は眉をひそめて、いったい何が起こっているのだろうか？ と墨をすりながら考え続けた。

僕はとにかく墨をすり、湖山先生を呼んだ。湖山先生は居眠りから目覚めて、描いて、僕はまた同じ言葉をもらい、また墨をすり：と、そんなことを何度か繰り返した。もういい加減疲れてきたので、いろいろ考えるのをやめて、3手を動かし、有り体に言えば適当に墨をすって湖山先生を呼んだ。すると先生は最初のときとまったく同じく、特に不機嫌でもなくフユカイでもなさそうな顔で、筆を取ると、

「筆洗の水を換えてきて」

と、言った。僕は言われたとおり廊下に出てすぐの場所にある流し場で、筆洗の水を新しいものに換えた。湖山先生の前に真新しい水を置いて席に着くと、先生は待ち構えていたように筆を取って、墨を付けて筆洗に浸した。5その瞬間、湖山先生は口を開いた。

3「これでいい。描き始めよう」

僕は湖山先生が何を言っているのか、分からなかった。どうしてまじめにすった墨が悪くて、適当にすった墨がいいんだ？

僕はなんとも腑に落ちないという表情をしていたのだろう。湖山先生はにこやかに笑って答えた。

「粒子だよ。墨の粒子が違うんだ。君の心や気分が墨に反映しているんだ。見ていなさい」

湖山先生は、筆をもう一度取り上げて、いちばん最初に描いた風景とまったく同じものを描いた。木立が前面にあり、背後に湖面が広がり、さらにその背後に山が広がっているという絵で、レイアウトはまったく同じだ。

だが湖山先生が筆を置いた瞬間の墨の広がりや、きらめきが何もかも違った。

画素数の低い絵と高い絵の違いと言ったらいいのだろうか。実際に粒子が違うというのなら、そういうことなのだろう。小さなきらめきや広がりやが積み重なり、一枚の風景が出来上がったとき、最初に見たときは漠然と美しいとしか感じられなかった絵が、二枚目になると懐かしさや静けさやその場所の温度や季節までも感じさせるような気がした。細かい粒子によって出来上がった湖面の反射は、夏の光を思わせた。薄墨で描かれた線のかすれが、ごく繊細な場所まで見て取れるので、眩しさや、色合いまでも思わせ、波打つ様子は静けさまでも感じさせた。その決定的な一線は、たった一筆によって引かれたものだった。4同じ人物が同じ道具で、同じように絵を描いても、墨のすり方一つでこれほどまでに違うものなのかと、僕は愕然とした。とたんに恥ずかしくなった。

僕はとんでもない失敗をさつきまで繰り返していたのだ。湖山先生は相変わらず、にこやかに笑っている。

私が何も言わなかったのが悪いが、と前置きした後湖山先生は言った。

「青山君、力を抜きなさい」

静かな口調だった。

「力を入れるのは誰にだってできる、それこそ初めて筆を持った初心者にだってできる。それはどういうことかという、凄くまじめだということだ。本当は力を抜くことこそ技術なんだ」

力を抜くことが技術？ そんな言葉は聞いたことがなかった。僕は分からなくなって、

「まじめというのは、よくないことですか？」

と訊ねた。湖山先生はおもしろい冗談を聞いたときのように笑った。

「いや、まじめというのはね、悪くないけれど、少なくとも自然じゃない」

「自然じゃない」

「そう。自然じゃない。我々はいやしくも水墨をこれから描こうとするものだ。水墨は、墨の濃淡、潤濁、肥瘦、階調でもって森羅万象を描き出そうとする試みのことだ。その我々が自然というものを理解しようとしなくて、どうやって絵を描けるだろう？ 心はまず指先に表れるんだよ」

僕は自分の指先を見た。心が指先に表れるなんて考えたこともなかった。それが墨に伝わって粒子が変化したというのだろうか。だが、たしかにその心の変化を墨のすり方だけで見せつけられた身としては、頷くしかない。

「君はとてもまじめな青年なのだろう。君は気づいていないかもしれないが、まっすぐな人間でもある。困難なことに立ち向かい、それを解決しようと努力を重ねる人間だろう。その分、自分自身の過ちにもたくさん傷つくのだろう。私はそんな気がするよ。そしていつの間にか、自分独りで何かを行おうとして心を深く閉ざしている。その強張りや硬さが、所作に現れている。そうするとそのまっすぐさは、君らしくなくなる。まっすぐさや強さが、それ以外を受け付けなくなってしまう。でもね、いいかい、青山君。水墨画は孤獨な絵画ではない。5水墨画は自然に心を重ねていく絵画だ」

僕は視線を上げた。

言葉の意味を理解するには、湖山先生の声があまりにも優しすぎて、何を言ったのか、うまく聞き取れなかった。不思議そうな顔で、僕は湖山先生を見ていたのだろう。湖山先生は言葉を繰り返した。

「いいかい。水墨を描くということは、独りであるということとは無縁の場所にいるということなんだ。水墨を描くということは、自然との繋がりを見つめ、学び、その中に分かちがたく結びついている自分を感じていくことだ。その繋がりが与えてくれるものを感じることだ。その繋がりといいしよになつて絵を描くことだ」

「繋がりといいしよに描く」

僕は言葉を繰り返した。僕にはその繋がりを隔てているガラスの部屋の壁が見えていた。その壁の向こう側の景色を、僕は眺めようとしていた。

その向こう側にいま、湖山先生が立っていた。

「そのためには、まず、心を自然にしない」と

そう言つて、また湖山先生は微笑んだ。湖山先生が優しく筆を置く音が、耳に残った。その日の講義は、ただそれだけで終わった。何か、とても重要なことを惜しみなく与えられているようで、そのすぐ前を簡単に通り過ぎてしまいうようになっていて自分を感じていた。

小さな部屋に満たされた墨の香りと、湖山先生の穏やかな印象が、カチコチに固まっていた水墨画のイメージをボロボロと打ち壊していくのが分かった。

父と母が亡くなって以来、誰かとこんなふうに関わり長い時間、穏やかな気持ちで向き合ったことがなかったのだと僕は気づいた。

(砥上裕将『線は、僕を描く』による)

※ 森羅万象……宇宙間に存在する数限りない一切のものと。

問一 〓 〓 ① 〓 ⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 〓 3 を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 感いつつ イ 恐る恐る ウ ただなんとなく

問三 〓 1 「僕は背筋がぐっと伸びた。」とありますが、このとき「僕」はどんな気持ちでしたか。説明しなさい。

問四 〓 a・bの意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 一気呵成 ア 物事をいい加減にやってしまうこと。 イ 物事をぶっきらぼうにやってしまうこと。

ウ 物事をいらいだちながらやってしまうこと。 エ 物事をすぐにやってしまうこと。

b 腑に落ちない ア 興味がわかない。 イ 納得できない。

ウ がっかりしている。 エ 拍子抜けしている。

問五 〓 2 「僕は啞然としながらも」とありますが、「僕」が啞然としたのはなぜですか。説明しなさい。

問六 〓 3 「これでいい。描き始めよう」について、次の問いに答えなさい。

① 湖山先生が「これでいい。」と言った理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」が墨をするのに迷っていることがわかり、習い始めたばかりだからこの辺でやめておこうと思ったから。

イ 同じ作業の繰り返しで疲れていた「僕」が集中力を取り戻したとわかって、本気で教えられると感じたから。

ウ 筆の先から筆洗の水に流れていく墨の様子で、墨の粒子が水墨を描くのにふさわしい状態だと感じ取ったから。

エ 筆洗の水を新しいものに換えたことで、描く風景に合わせて筆に含ませた墨の色を調整できるようになったから。

② 墨をするときに大事なことは何だったのですか。文中から五字以内の言葉で「〓こと」につながる形で抜き出しなさい。

問七 〓 4 「同じ人物が同じ道具で、同じように……」とありますが、最初と比べて湖山先生の絵にはどんな違いがありましたか。

それを説明した次の文の 1 〓 〓 3 〓 を補うのに最も適切な言葉を、それぞれ指定の字数で文中から抜き出しなさい。

同じ湖畔の風景を描いていても、最初は 〓 1 六字 〓 としか感じられなかったものが、二枚目になると、墨の 〓 2 二字 〓 の違いによって 〓 3 二字 〓 な表現が可能となり、懐かしさや静けさやその場所の温度や季節までも感じ取れる絵になっていた。

問八 湖山先生は「僕」をどんな人間だと見ていますか。文中の表現を用いて、句読点を含めて五〇字以内で説明しなさい。

問九 〓 5 「水墨画は自然に心を重ねていく絵画だ」とありますが、湖山先生は、水墨を描くということをどんなことだと考えていますか。それが具体的に述べられている表現を文中から一〇〇字以内で抜き出し、その最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい(問題文の一行は六〇字です)。その際、句読点や記号も字数に含めず。